ホスピタウン便り

発行責任者　ホスピタウン事務局
VOL68　平成 25 年 10 月

日野原重明先生からの御祝いの言葉

聖路加国際
メディカルセンター理事長
聖路加国際病院名誉院長
医療法人真誠会名誉理事長
日野原　重明
（2005 年、文化勲章受章）

このたび、医療法人真誠会が創立 25 周年を迎えられるにあたって、ここにお慶びのメッセージを贈りたいと思います。

医療法人真誠会を創設した小田貢博士は、開業当初より私の訳書「平静の心」（注：私の師であるウィリアム・オスラー博士著）をバイブルとして、ウィリアム・オスラー博士の医のアートを実践すべく努力してこられました。

そして開業 8 年目に私との出会いのチャンスがあり、小田博士の真摯な態度、そして情熱に共鳴し、平成 10 年に医療法人真誠会の名誉理事長を引き受けたわけであります。保健と医療と福祉とが一つのシステムとして、また、一医療法人の企画としてよりも住民に支えられたコミュニティーの事業としての構想、すなわちホスピタウン作りは 25 年前には非常に先進的なものでありましたが、医療福祉の制度が混沌とする現在、むしろ以前にも増して重要なビジョンであると感じております。

そして小田博士は、ひたむきな努力で理想的な医療福祉のまちづくりに身を投げ出し次々に夢を実現し、現在に至っております。

小田博士は、種々医療職に真誠会の向かうべき方向を明瞭に示し、その先頭に立った行動力には絶大なものがあります。

このような事業を次々に実現できた背景には、博士がウィリアム・オスラー博士により具現された病む人を愛し、子どもや老人をいたわる医のアートを、同士と共に地域の中に実現し、また私が 15 年前に真誠会での講演でお話しした 3V（vision,venture,victory）を実践されてこられたからに他ならないと確信しております。

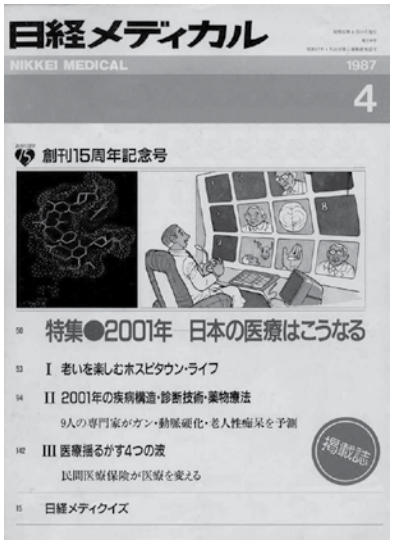
今回、第 4 のホスピタウンとなる米子中央ホスピタウンを作りあげられましたが、これからも大きなビジョンを持ち続け、ヒューマニティーに富んだ医のサイエンスをオスラー精神をもって米子、鳥取県、そして全国に向かって伝道し、そしてこの理念を次世代にバトンタッチすることが小田博士のミッションだと信じ、そして次の 3V に向かって邁進されますことを心より御祈り申し上げます。

以上のメッセージを今日贈ることが出来たことを、私はこの上なくうれしく思います。

Since1988.9.9
25th Anniversary
Shinseikai

ご挨拶
地域医療福祉に捧げる

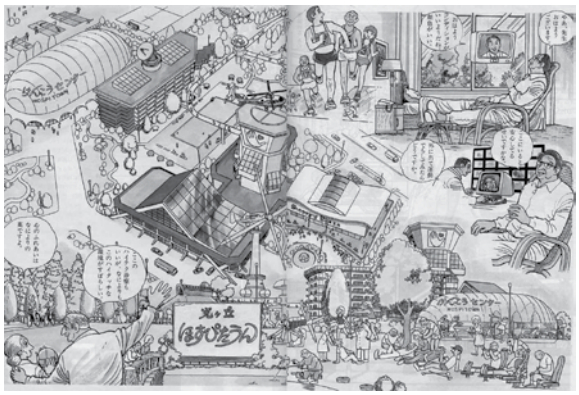
医療法人真誠会理事長
社会福祉法人真誠会理事長
小　田　　貢



私は開業に先立ち、どのような医療を展開するか非常に悩んでいるときに、たまたま目にした「日経メディカル」の特集号に「ホスピタウン構想」が載っていました。そこには当時は夢のようなＩＣＴを駆使した医療施設や健康増進施設があり、患者さんも元気な人も、そして老若男女が明るく集っている様子が生き生きと描いてありました。

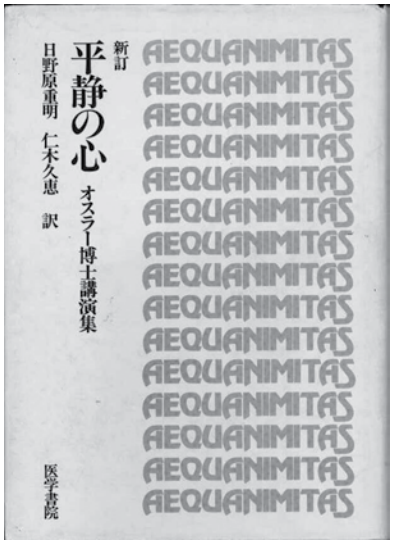
私はこれを見て米子の地にも、医療福祉のまちホスピタウンを作ろうと思い、昭和 63 年９月９日に「真誠会医院」を開設しました。平成７年に介護老人保健施設「ゆうとぴあ」を開所。ホスピタウンの核ができ上がりました。

その後も私の夢は膨らみ、「弓浜」、「外浜」の２つのホスピタウン、そしてこのたび、「米子中央」ホスピタウンを建設。これでホスピタウンが４つの医療福祉の拠点となり、米子市のほとんどの場所で真誠会のサービスを提供できるようになりました。



一方で本年５月、私の強力な助言者として元鳥取大学医学部付属病院長で前山陰労災病院長の石部裕一先生を真誠会に招聘することができました。石部先生とタッグを組むことができ、新しい時代を切り開いていくことに大きな希望を感じています。

しかしながら振り返ってみると 25 年間はまさにいばらの道でした。そしてその苦しい道のりを支えたのは聖路加国際メディカルセンター理事長の日野原重明先生の教えでした。私は出会う前から日野原先生の訳書「平静の心」を心の支えとし、先生を私淑していました。平成 10 年からは先生に師事し、その後もその理念と先生の師のウィリアム・オスラー博士の理念を実践し、日野原先生の背中を見ながら後を歩かせていただきました。その結果、今回の４つのホスピタウンの誕生という、25 年前には想像も出来なかったことが現実になったのです。



真誠会創立 25 周年の今年は、次の 50 周年に向けてのビッグバンであり、今後真誠会は鳥取県全体の医療福祉に貢献するとともに、日本全体に対して愛と希望と勇気にあふれた医療福祉のメッセージを発信していきたいと思います。

そのプロセスでまた素晴らしい人々と新しい出会いがあり、新しい創造の夢が沸いてくることを楽しみにしております。

地域医療福祉のリーディング・カンパニーを目指して

地域医療再生基金の交付を受けて

平成24年度、真誠会は厚労省直轄事業の在宅医療連携拠点事業所（全国で105カ所）に選出。その活動はホームページ、「コズミックリンク」で見ることが出来ます。

同 25 年度は鳥取県の在宅医療連携拠点事業所の指定を受け、県より 1500 万円の事業費を交付されました。この基金で同 26 年度まで、さらなる在宅医療、地域医療の発展に資する事業を展開することとなりました。

このように厚労省、県と継続的に在宅医療連携拠点事業所に指定されたことは、日ごろの真誠会の在宅医療、福祉活動、そして法人としてのCSR（社会的責任）を果たしていることが認められた結果と自負しています。

↑コズミックリンク HP へ
スマートフォン対応

包括ケアシステムの確立のために真誠会は、次の 6 つのテーマに挑戦していきます。

①多職種連携の課題に対する解決策の抽出
②在宅医療従事者の負担軽減の支援
③効率的な医療提供のための多職種連携
④在宅医療に関する地域住民への普及啓発
⑤在宅医療に従事する人材育成
⑥災害発生時に備えた対応策検討等

今回の「在宅医療連携拠点事業所」指定を受けて在宅医療のモデル事業をすることは、私たちが単に医療福祉複合体真誠会のために医療福祉をするのではなく、鳥取県西部、あるいは県全体の地域医療福祉の充実のためのリーダーシップを取り、リーディング・カンパニーとして社会に貢献する組織として成長し続けるという将来の姿を示していると考えています。

また同事業が終了しても引き続きその精神を引き継ぎ、より安心できる高齢社会の構築に寄与していきます。それが真誠会創立 25 周年記念事業とも言えると考えています。

小田理事長の
講演会活動記録
医療法人真誠会
社会福祉法人真誠会
理事長　小田　貢

地域包括ケア・在宅医療推進フォーラム

平成 25 年 10 月 19 日鳥取県主催で、湯梨浜町にあるハワイアロハホール（大ホール）で「地域包括ケア・在宅医療フォーラム」が開催されました。基調講演は、東京大学高齢社会総合研究機構特任教授　辻　哲夫先生が「地域包括ケアと在宅医療　住み慣れた地域で暮らし続けるために」というテーマで全国のモデル事業を発表しました。

その後、パネルディスカッションとなり真誠会小田貢理事長が「地域の再構築　包括ケアなくして、在宅医療なし　～今必要なパラダイムシフト～」というテーマで発表しました。骨子は、真誠会は米子市内４つの拠点で、独自で地域包括ケアチームを展開していること、米子市和田町で地域お輿しを支援し、米子・鳥取の高齢者の町のモデル作りをしていること、生活支援隊をつくり、電話一本で高齢者の生活に必要なあらゆる支援ができる体制を作っていることの３点でした。

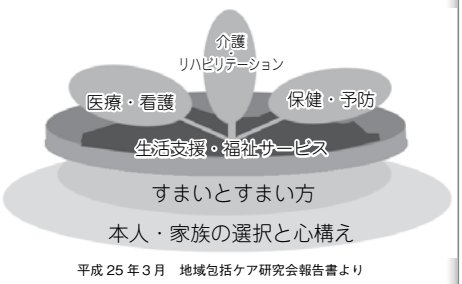
東京大学の辻特任教授は真誠会の取り組みを非常に高く評価しました。

今後は真誠会モデルが米子市、鳥取県に広がることが小田理事長の夢であり、取り組みです。

本人・家族の選択と心構え
「植木鉢の下」が表す意味

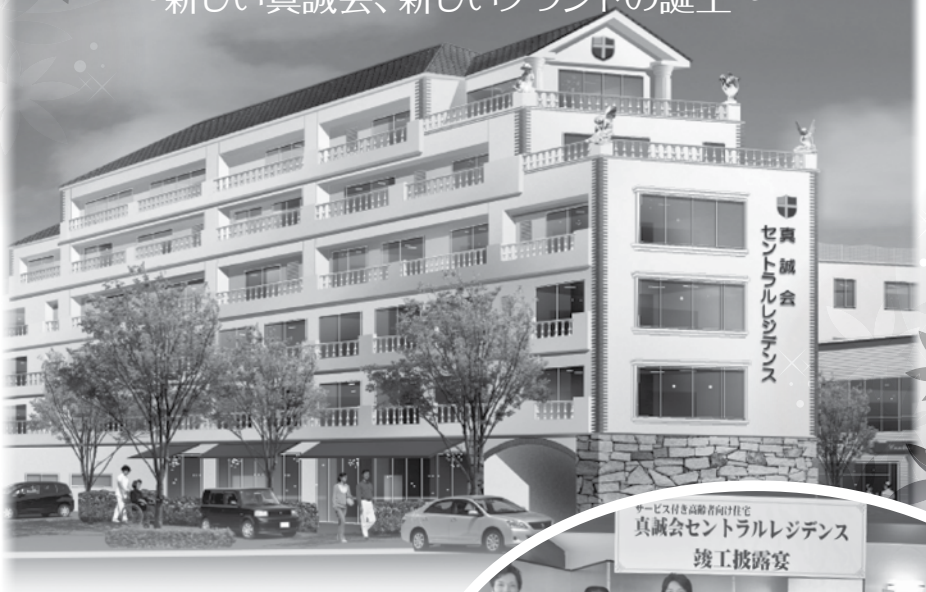
「地域包括ケア研究会報告書」にある、植木鉢で表した地域包括ケアシステムの模式図（図１）がある。
その図の植木鉢の下に「本人・家族の選択と心構え」とあるが、ここに厚生労働省の強いメッセージがあることを見逃してはならない。
一番大切な基礎は、本人・家族の選択と心構えであること、言い換えれば本人・家族の自己責任を促している。
超高齢社会の小さな福祉の社会（公助、共助）の中では、できるところまで個人あるいは地域の力（自助、互助）で強く生きていく。
健康の自己管理、経済的な自己責任。まさに個人の生き方、覚悟が問われる高齢社会になっていくのである。

図1　地域包括ケアシステムの模式図



平成 25 年３月　地域包括ケア研究会報告書より

米子中央ホスピタウン
真誠会セントラルレジデンス竣工
～新しい真誠会、新しいブランドの誕生～



真誠会セントラルレジデンスが 10 月 3 日に竣工しました。

真誠会グループは過去 25 年の間に各種の医療福祉施設を整備してきましたが、サービス付き高齢者向け住宅（サ高住）は初めての施設です。昨年より米子市の中心街の福米西小学校隣に 6 階建てのサ高住を建設し、このたび完成したものです。

この施設の特徴は、エクステリアもヨーロッパ風のイメージで、内装もインテリアもシャンデリアなど今までのサ高住ではあまり見られない豪華な造りになっています。また、同じ敷地内にある真誠会ローズガーデンで、デイサービス、リハビリ施設が使えること、また入居される方を見守る真誠会の医療福祉の総合的なサービスが受けられます。

この医療福祉の総合的なサービスとは、24 時間体制の緊急サービス、訪問診療、訪問看護、訪問介護、あるいは生活を支援するための豊富な機能を持つ真誠会グループの生活支援隊による生活の支えです。また、食事や娯楽、相談サービスもあります。

このような建物の質、環境、住民をサポートする体制などの総合的観点から、これからのサ高住のモデルになるものと思われます。

この場所は、国道 431 に近く、近隣には各種のお店があるので、生活、買い物、そぞろ歩きにも最高の場所です。

ホテルのような食堂で、
食事を召し上がっていただけます

1 階のラウンジで、ゆったりソファーに座りながら
楽しく団らんしていただけます。

外浜ホスピタウン　グループホーム「椿庵・桜庵」竣工

和田町にある複合型サービス真誠会ふる里の西側に建設中であったグループホーム「椿庵・桜庵」が完成しました。それぞれ９人の定員です。

真誠会は既にグループホーム青松庵（富益町）を運営しておりますが、青松庵は建物だけでなく、管理面でも外部評価で高い評価を得るとともに、地元の皆さんと連携をとりながら運営してきました。

グループホーム桜庵・椿庵は、真誠会が青松庵で培ってきたノウハウを生かし、認知症の皆さんにベストな介護ができるよう、そしてより多くの認知症患者の方に真誠会の認知症看護を役立てたいという理念で開設されたものです。

またこのグループホームの特徴は、複合型サービス真誠会ふる里と隣接しているため相互交流をしながら、この地域の福祉センターとして機能し、地域に貢献できればと思っています。

竣工式では、野坂市長にも瓦の芳名録にご記帳いただきました。

実はここに用いられている瓦、現在修復工事中の東本願寺阿弥陀堂（京都）の屋根から降ろされた 120 年前の瓦です。苦労してお堂を再建した「先人の遺産」を無駄にしてはならないと、小田理事長の提案で、瓦を京都から引き取り、施設の玄関、庭、内装に装飾をほどこして再利用されています。ご利用者様、地域の方々に見ていただければという強い思いが込められています。そして、施設の至る所に京都の息吹を感じます。瓦と掛け軸の書は、数多く「日展」に入選されている森田尾山先生 作です。

■名　称：グループホーム椿庵・桜庵（認知症対応型共同生活介護事業所）
■定　員：1 ユニット 9 名× 2 ユニット
■所在地：鳥取県米子市和田町 1722 番地

■運営理念
1. 入居者の方が安心し、心豊かな生活が営めるよう一人一人に必要な支援をさせていただきます。
2. 地域の中で普通の暮らしが出来るよう物理的・精神的・社会的な環境を整え、実現していきます。
3. 入居者を支援する職員の資質を高め、介護に必要な知識、技能倫理の向上に努めます。

■利用対象者
- 認知症の症状を有する方で、要介護の認定を受けられた方
- おおむね身辺の自立ができており、共同生活を送ることに支障の無い方（極端な暴力行為や自傷行為があるなど、共同生活を送ることが難しい方は原則として対象外となります。）
- 医師により中程度の認知症と診断されグループホームによるケアが適当とされた方

複合型サービス真誠会 ふる里

小規模多機能センター真誠会ふる里は９月、訪問看護部門などが入るスペースを増築し、これまでの施設と増築部分をあわせて、名称を複合型サービス真誠会 ふる里として改め再出発することになりました。

これまでの小規模多機能センターとの違いは小規模多機能施設部分の通所の介護度が、これまでの要支援Ⅰから要介護Ⅰに上げられ、また訪問看護部門が加わったことにより、この施設を中心とする在宅医療、地域医療が強化されたことです。

複合型サービス
真誠会 ふる里
お披露目式

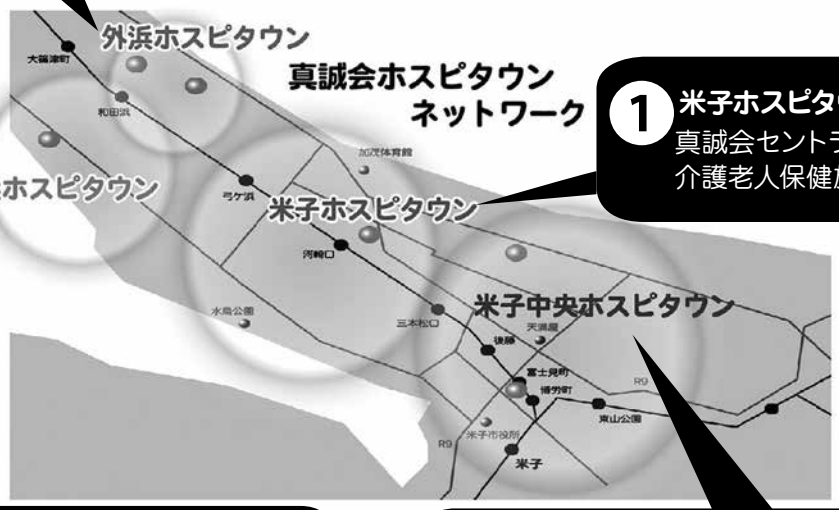
６月 13 日には地域の方と一緒にお披露目式を行いました。
宿泊できるよう個室もあります。和田にちなんで、ベッドカバーも弓ヶ浜絣です。地域の方も熱心に見学されていました。

4つのホスピタウンの誕生!!!

米子市全体をカバーするサービス体制の完成

今まで、米子ホスピタウン（河崎）、弓浜ホスピタウン（大崎）、米子中央ホスピタウン（西福原）がありましたが、本年 10 月に次の 4 つのホスピタウンに分類、統合管理されます。

③ 外浜ホスピタウン
複合型サービス真誠会 ふる里　グループホーム 椿庵・桜庵（和田町）
在宅福祉センター真誠会、グループホーム 青松庵（富益町）



① 米子ホスピタウン（河崎）
真誠会セントラルクリニック
介護老人保健施設ゆうとぴあ

② 弓浜ホスピタウン（大崎）
介護老人福祉施設ピースポート
介護老人保健施設弓浜ゆうとぴあ
ケアハウス　リバーサイド

④ 米子中央ホスピタウン
真誠会セントラルローズガーデン
真誠会セントラルレジデンス（西福原）
真誠会ローズガーデン（富士見町）

いえはら歯科

いえはら歯科
院長　家原　猛

2013　秋

9 月 8 日未明、2020 年東京での夏季オリンピック・パラリンピックの開催が決まりました。とても大きな希望の持てる、日本にとって久々の明るい大ニュースです。今まで以上に、生きていくことがとても楽しみになってきました。猪瀬都知事をはじめ、今回の招致に関わられた多くの方々、いや成らなかった前回も含めて、その熱意と御尽力に深く深く感謝し、ともに喜びたいと思います。多くの子ども達に夢と元気を与えることでしょう。

1964 年の東京オリンピックの時、私は小学 1 年生でした。池田内閣で国民所得倍増計画、高度経済成長の時代。夢の超特急東海道新幹線が開通し、首都高速ができ、カラーのテレビ放送も始まったように記憶しています。今から思うと、夢を描き易い時代や社会だったように思います。重量挙げで三宅義信選手が金メダルを獲得したこと、男子マラソン円谷幸吉選手の銅メダルなどが印象的でした。そして国立競技場、日本武道館をはじめいろいろの施設が現在でも社会資本として活用されています。

2020 年、日本社会は東京で世界最大のスポーツ（平和と健康、そして文化）の祭典を開催することで、少子高齢社会、被災地復興、環境問題、エネルギー問題、経済問題などなどいろいろ懸案はあるけれども、その時代・社会を投影し、未来を見据えた、また新たな進化形を提示してくれるに違いない。大いに期待したいと思います。

辻田耳鼻咽喉科

辻田耳鼻咽喉科
院長　辻田　哲朗

カエサルの神殿

コロッセオにて

7 月に職員 6 名を連れて計 7 名でローマとフィレンツェまで 3 泊 4 日と駆け足で行ってきました。この旅行のために半年前から準備を始めました。まずローマとフィレンツェのガイドブックを何冊も買って調べ上げ、イタリアの本やイタリア映画も見て、さらに職員も含めて毎週イタリア語会話も勉強して、簡単なイタリア語ならなんとかしゃべれるようになりました。航空券やホテルの手配も全て自分でやりました。昔では考えられないことですが、美術館や列車そしてレストランの予約などすべてインターネットで日本に居ながらにして出来てしまったのでいやいや便利な世の中になったものです。

イタリアではボクはバチカン美術館とフィレンツェのウフィツィ美術館に行きたかったのですが、その他にもお目当ての場所はたくさんありました。今回はその内ローマの真ん中にあるローマ時代の遺跡が残っているフォロ・ロマーノのことを書いてみます。このフォロ・ロマーノですが、昔の遺跡らしきものがあるだけで、ローマ帝国時代の知識がなければただの古代のガラクタにしか見えません。ここにカエサルの神殿と言ってカエサルが火葬された場所が残っていました。これはアウグストゥスがカエサルのために造ったものです。そこには2000年たった今でも花が手向けられていたのには感動しましたし、人が一番多く集まっていました。やはり西洋人にとってカエサルは永遠のヒーローのようです。ローマ帝国と言えばカエサルがガリア遠征からルビコン川を渡ってローマに帰って来て天下をとってから、オクタビアヌスが初代皇帝になるまでの期間がダイナミックで一番おもしろい。ちなみにカエサルはボクと同じ位の年齢の時に暗殺されています。そのカエサルですがどうも「英雄、色を好む」そのものだったようで、当時の元老院議員の奥さんたちに片っ端からちょっかいを出していたみたいです。暗殺された理由も案外この辺りにあったのかも。そうでなければ寄ってたかって 20 数カ所もメッタ刺しになんかされません。かえってそんな人間臭いカエサルに親しみが湧いてきます。ここではしばし時を越えて遥か 2000 年前のカエサルが生きた時代に思いを巡らすことができました。

市民フォーラム 第4回「認知症サミット鳥取」成功裡に終わる

8月4日、米子市文化ホールのメーンホールで、ほぼ満員の聴衆を迎えて、市民フォーラム 第4回「認知症サミット鳥取」を開催しました。

「認知症サミット鳥取」は第1回が米子市で開催され、第2回は倉吉市、第3回は鳥取市でそれぞれ開かれ、鳥取県内を一巡して再び米子市で開催されたものです。

開会に際しては、昨年に引き続き平井鳥取県知事にご挨拶をいただく予定でしたが、今回は平井知事が急きょ海外出張されることになったため、ビデオレターでご挨拶をいただきました。

平井知事はご挨拶の中で、鳥取のような高齢県での認知症に対する活動の重要性と今回の活動に対する励ましの言葉があり、野坂米子市長からも今回の認知症サミット鳥取に対する高い評価と今後に対する期待の言葉がありました。

今回も初めに鳥取大学医学部保健学科教授、浦上克哉先生の基調講演「認知症医療の課題と今後の展望」があり、4人のパネリストによるシンポジウムが行われました。

後半は真誠会スタッフと米子市職員ボランティアで構成された「ご近助座」による寸劇があり、涙あり、笑いありの寸劇は聴衆を沸かせました。劇の後、劇の内容から話を発展させ意見交換が行われました。

今回のような劇を公演することにより、一般市民の方にも認知症について十分に理解していただき、その問題点、解決法などについても、より身近なものとして捕らえていただける方法としてとても有効と感じました。

認知症サミット鳥取は主に一般市民の皆さんに対して、認知症への理解だけではなく、早期発見、早期治療、認知症の患者さんに対する家族の対応の仕方、認知症の患者さんでもその地域に馴染んで生活を継続できる社会を作ることの大切さなどを啓発する目的で始められた市民フォーラムでした。鳥取県内を巡回し、市民、行政からもその活動の意義を認めてもらえるようになったという確かな手ごたえが感じられる第4回のサミットになりました。

さて第5回は来年、再び倉吉市で開催いたしますが、倉吉大会は鳥取短期大学学長で藤田学園理事長の山田修平先生のご厚意で、会場は鳥取短期大学シグナスホールで開催される予定になっています。鳥取県中部地区での認知症に対する理解の盛り上がりに貢献できるサミットとなるよう、皆様のご協力をお願いいたします。

とっとり県民カレッジ連携講座
市民フォーラム 第4回 認知症サミット鳥取

ごあいさつ　小田　貢

「認知症サミット鳥取」は県内の会場を巡回し、米子では2回目の開催となりました。ご承知の通り、認知症の方は増え続けています。多くの方が自分も認知症になるのではないかと心配され、年々関心も高くなっています。認知症を正しく理解し、予防していく。地域で認知症の方を支える。認知症になっても暮らしていける明るい町づくりに一緒になって取り組んでいきましょう。

鳥取大学医学部保健学科
生体制御学講座
教授　浦上克哉先生

■基調講演「認知症医療の課題と今後の展望」

認知症医療には三つの課題があります。

まず早期診断です。今年、厚生労働省の調べで認知症患者は全国に462万人。2年前は200万人でした。急に増えたのではなく、明らかに早期診断ができていなかった。さらに予備群（軽度認知障害）は400万人。検査を恐れず、物忘れを早い段階でチェックすることが大切です。

二つ目は、適切な薬物治療です。代表的なアルツハイマー型認知症にはアリセプト、レミニールなど大きく4種類の薬があります。改善の変化がなくても、進行を食い止めている可能性があり、薬を勝手に止めないよう注意が必要です。増量や薬の組み合わせで記憶力が戻った例もあります。

最後に予防対策です。認知症は治すことができる、予防できることが分かってきました。神経細胞が死んでからでは遅く、そのためには早期発見です。

平成16年から琴浦町を皮切りに展開し、効果を上げている「物忘れ相談プログラム」を鳥取発の取り組みとしてさらに推し進めていきたい。

■パネルディスカッション / テーマ「いつまでも 地域で暮らせるために」

医療法人真誠会
理事長　小田　貢氏

予備群と言われる軽度認知障害の人の約 70% が 7、8 年以内に認知症に移行すると言われています。物忘れが最近ひどいなと思ったら、かかりつけ医にぜひ相談してください。早期発見、早期治療の大切なポイントです。

本日の会場アンケートによりますと、認知症に対する考え方は随分進歩してきたと思います。発症率が高いことを多くの人が知っています。自分、家族に対して心の準備ができている人も多い。こうした知識は、みんなに伝え、考えていくことが大切です。

認知症はだれもがなりうる病気です。糖尿病や高血圧などの生活習慣病が誘発し、増悪させます。運動する、食事に気を付ける、禁煙する―など健康的な日常生活を送ることが認知症の予防につながります。そして、周囲と和やかな人間関係を作ることが、地域での助け合いを広げます。

認知症の人と家族の会
鳥取県支部
代表世話人　吉野 立氏

アルツハイマー病の母を 10 年間在宅で介護し、看取りました。言葉で分かり合うことができず、びっくりするような行動に、いい感情を持てないこともありました。しかし、認知症の人の行動には全て何か原因があるということを学びました。

認知症のそれらしい兆候にもっと早い段階で注意を払っていたら、違う生活が送れたかもしれない。そう思うこともありました。早い時点で認知症に気付くこと。本人と話ができる早い段階での受診をお勧めします。

認知症の人はこれからさらに増えてきます。正しく理解し、新しいケアを地域で一緒になって考えていきましょう。そのことが医療のレベルを押し上げることにもなります。

私たちの会では毎月、介護家族の集いを開いています。困ったときには「鳥取県認知症コールセンター」に相談してください。

若年性認知症問題に
取り組む会「クローバー」
代表　藤田和子氏

若年性アルツハイマー病と診断され、大きなショックを受けました。早期診断と治療により、6 年たった現在も自立した日常生活を送っています。

認知症に対して一般に疾患としての認識が低いと感じています。この病気は緩やかに進行していきます。実際には家族が気付く随分前から発症しています。その理解ができていないため、病気に辛い思いをする本人や家族を増やし続けています。

社会の中に出ていく認知症の人をどう支えていくのか。その仕組みも必要です。買い物をする。仕事を続ける。そうした状況を地域で理解し、サポートする体制が必要です。とくに初期においては、欲しいサービスも受けることができません。

偏見をなくし、自分らしく生きる。そのためにはどうすればいいか、みんなで考え直す時期だと思います。

米子市弓浜地域包括
支援センター
管理者　森脇美香氏

私たちのセンターが受け持つ地域の人口は約 2 万 3 千人で、高齢化率は 26・7% です。社会福祉協議会の「いきいきサロン」などの支援を通して介護予防などに取り組んでいます。認知症への関心は高いものの、「分かるのが恐い」など現実を受け止めたくない傾向が見られます。

独自の取り組みとして毎年 1 回、「弓浜助け合いネットワークの会」を開催しています。認知症になっても安心して暮らしていける町づくりを目的に、講演や活動発表を行い、毎回約 300 人が参加しています。

これまでの会を通して、認知症を身近な問題としてとらえるようになった反面、「認知症が病気である」との認識がまだまだ薄いことが分かりました。

継続的に分かりやすい啓発を行い、民生委員との連携も強化し、重度化予防に努めたいと考えています。

権利擁護ネットワーク
ほうき
事務局長　末吉徳二郎氏

このネットワークは昨年 4 月、米子市の「ふれあいの里」に、鳥取県と県西部 2 市 7 町村の連携で開設されました。成年後見制度に基づき、判断能力が衰えた認知症の高齢者や障がい者の財産などの権利を守る活動をしています。

本人意思の尊重、個人の尊厳、権利擁護―の意識が薄いと実感しています。認知症であれ、生きているその人の生活は全てにおいて権利が保証されています。親子でも他人。「違法ですよ」と話すことが増えています。

認知症を含め、社会の中で権利を守ってあげなければならない人は全国に約 600 万人います。県西部では約 1 万 6 千人いますが、成年後見人は千人に満たないのが現状です。市民後見人の育成も急がれます。

原点は人の命。そうした意識を持って地域づくりを進めていくことが大切です。

■寸劇・ディスカッション /
第 1 幕…劇「認知症の発症」
第 2 幕…劇「認知症に対する社会的資源」
第 3 幕…劇「認知症になっても、家で最期を過ごしたい」

社会医療法人明和会
医療福祉センター
渡辺病院
院長　渡辺　憲氏

高齢化が進み、認知症の人はますます増えています。これからの地域社会では、すべての人が若いころから健康管理に取り組み、認知症になるリスクを少しでも抑えることが求められます。心も体も元気で社会生活を続けることです。

生活習慣病の予防はもちろん、うつ病を予防し、社会の中で温かいコミュニケーションを保ちながら暮らしていく。そのことが、認知症予防に極めて重要であることも分かってきました。

地域におけるケア、ターミナルケアでは、かかりつけ医のかかわりも大切です。関係機関が共に力を合わせ、生き生きと暮らしていける成熟した地域社会づくりを考えていきたいと思います。

鳥取短期大学
学長　山田修平氏

だれもが介護し、介護される時代となりました。介護は、命と人生の重ね合わせだと思います。親は子どもを育むことで、自分自身の人生を豊かにします。子どもはそうした親の愛情の中で育っていきます。介護も同じです。

介護し、されることによりお互いの命と人生を豊かにします。とはいえ、介護は先が見えません。

もし、家族に、認知症なり、介護を必要とする人がいたらどうするか。「自分が」介護する気持ちは大切ですが、自分だけで背負わないことです。家族全員の協力が必要です。また公的なサービスをよく知り、上手に活用したいと思います。認知症や介護の技術も身に付けることです。さらに地域の温かいまなざし、助け合いも不可欠です。

米子市福祉保健部
長寿社会課
主幹　荒木美都江氏

平成 25 年 4 月現在、米子市の介護認定者は約 7600 人で、65 歳以上の 5 人に 1 人が認定を受けています。このうち 66% の人に何らかの認知症の症状が見られ、高齢化率の上昇とともにその数は増加しています。

家族が手に負えなくなり、やっと介護申請する。さらに独居、また夫婦の認知症など複雑なケースの中で、生活が破綻してから支援することが多いのが、介護の現状です。

こうした問題に対処していくには、私たち支援者の感度を上げて早く気付く。同時に地域の気付きや見守り支援で早期発見につなげていくことが重要です。地域包括支援センターにどうぞ気軽にご相談ください。

認知症をより良く理解してもらおうと、真誠会と米子市長寿社会課の職員による「劇団ご近助座」が「やっぱり家はいいねえ～」と題した寸劇を披露した。認知症を発症した家族の戸惑いや、施設での支援、在宅での看取りなどがユーモラスに演じられ、浮き彫りとなった課題に 4 人のコメンテーターが答えた。

職員コース研修の充実（外部講師による）

熊川寿郎先生の管理者研修に参加して

真誠会　看護・介護統括部長　三ツ木育子

平成 21 年から、目標管理の一手法として BSC(バランスト・スコア・カード）を導入してきましたが、理解が不充分で効果的な管理運営につながっていきませんでした。

そこで改めて平成 24 年 7 月から BSC による目標管理指導に豊富な経験と成果をあげておられる国立保健医療科学院　経営科学部　部長　熊川寿郎先生をお迎えして、管理者 34 名を対象に基礎から戦略マネジメントを学び続けています。一人一人の管理者が論理的思考や、プレゼンテーション力等を身につけて成長している様子がうかがわれます。又、何よりも組織に対する意識の変化、とりわけ真誠会ブランドを背負った責務の認識と組織の結束力が向上していると思われます。

社会福祉法人真誠会　総務課長　前田　浩寿

BSC 手法を当グループの事業責任者が学び、全社一丸となって目標達成に向かう体制を強化しております。この手法を学ぶ２年間を通してグループの責任者同士が多くの意見交換を行い、以前にも増してお互いの理解が深まりました。事業所間の連携を求められる医療・福祉サービスを、私たち責任者の一体感をもって提供したいと考えております。

訪問リハビリテーション課　課長　大西　博巳

平成 24 年 9 月より、熊川先生の管理者研修に参加させていただきました。

その研修において、事業所計画書立案のために、①事業所のあるべき姿と現在の事業所の状態を分析する（GAP 分析）手法　② GAP 分析より導き出された課題を緊急性・重要性の視点より優先順位のマトリックスに分類して最優先に取り組むべき課題を抽出する　③抽出された課題を MECE による原因分析をして真因を決定　④真因を MECE により分析することにより最優先対策を決定し　⑤戦略目標を作成する方法　⑥SWOT分析及びクロス SWOT分析より戦略目標の立案及び BSCシート作成をグループワーク・講義・実践を交えながら学習をいたしました。事業所目標を作成するに当たり、この目標は何のために誰のためにするのか？を常に考え、職員とともに考えながら作成することが出来ました。今後は、PDCA サイクルを回しながら事業所目標が絵に描いた餅とならぬように事業所責任者として役割発揮をしていきます。このような貴重な研修を受けることができ真誠会の教育体制に感謝いたします。

ヒューマン・コミュニケーション研修

鳥取大学医学部　准教授　高塚人志先生を講師に迎え体験から気づき学ぶ「ヒューマン・コミュニケーション講座」あなたといると元気がわいてくる　ーあなたのコミュニケーション力やホスピタリティ・マインドを磨くー　をテーマにした研修会（4 回シリーズ）が行われました。研修は、【管理者グループ】と【接遇インストラクター】と二つのグループに分かれて約 60 名が受講しました。

私たちは、いろんな方々と関わり、他者と協働して、様々な役割を果たして生活しています。

高塚先生の研修は、人にとって当たり前のはずのホスピタリティ・マインド(思いやりの心）への気づきの体験学習です。医療、介護で働く私たちにとっての中心は患者さんや利用者さんです。挨拶、身だしなみ、コミュニケーションなど大切なことではありますが、一番は **“相手に関心をもつ”** ことから始まります。

日ごろ、どんな気持ちで仕事を行っているのか、本当に親身になって患者さん、利用者さんと接しているのか、理解しているのか・・。偽善的な仕事をしていないか。自分の人間力が問われます。まず自分を知ることから人間関係は始まると先生は教えてくださいました。「気づきの体験学習」を通して自分と向き合い、自分を見つめ直し、「やさしさ」「元気」を与えることができる人間に成長したいと思います。

受講生は背中合わせに座り、顔が見えないなかで正確に相手に内容を伝えなければなりません。コミュニケーション能力が試されます。

千枚七夕
（復興祈願）

真誠会では開業当時より毎年、吹き抜けを突き抜けるほどの大きな孟宗竹で七夕飾りをしておりましが、クリニックを洋風に改装したために約 12 年前から中断していました。

本年は真誠会創立 25 周年を記念し、同時に東北の早い復興、東日本大震災の犠牲者の方々のご冥福を祈って大七夕飾りをつくりました。今回の孟宗竹は、吹き抜けの天井につくほどの高さで、細断した竹ではなく笹が枯れないようにと根っこから掘り起こし鉢植えにして飾りました。

短冊は患者さんや全職員に呼びかけて、千枚を目標に企画しました。実際に出来上がってみると、約 1300 枚の短冊が飾られました。短冊には、東北復興への願いが多く書かれていました。

施設で暮らす子どもたちのために
ヤッホーキッズ フードドライブ
に協力しています。

真誠会では、利用者様やご家族様、地域ボランティアさん、職員に呼びかけ、缶詰一つからでもできるボランティアを行い、施設で暮らす子どもたち食品を寄附しています。今年もたくさんの善意の品が集まり、施設に寄附することができました。

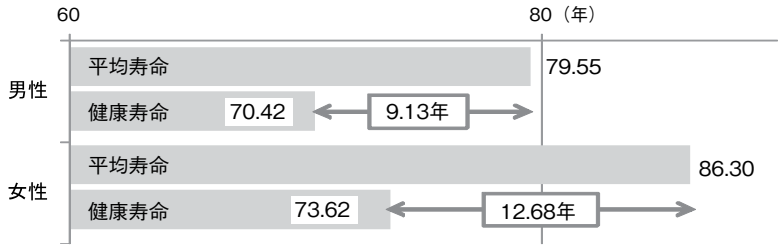
敬老の日 ～健康寿命を延ばし、元気で長生きを～

100 歳おめでとうございます。
健康に歳を重ねていることは、人生の素晴らしいお手本です。
これからもお体に気をつけて元気におすごしください。

敬老の日は、長い間社会の為に尽くしてきた高齢者を敬い、長寿を祝う日です。また、それとともに高齢者の福祉について関心を深め、高齢者の生活向上に努めるよう若い世代に促すという気持ちが込められています。

今年も施設で敬老会を行いました。介護老人保健施設ゆうとぴあでは 101 歳（1 名）、102 歳（2 名）計 3 名、介護老人保健施設弓浜ゆうとぴあでは 100 歳（1 名）、介護老人福祉施設ピースポートでは 100 歳（1 名）のご長寿の方が入所されています。

日本人の平均寿命は年々長くなっていますが、残念ながら自分で自分の身の回りのことができる寝たきりではない健康寿命は、平均寿命より男性では 9.13 年、女性では 12.68 年少ないのです。これから大切なのは単に平均寿命を伸ばすことではなく 1 年でも 2 年でも健康寿命を長くすることなのです。



（平成 22 年「健康寿命における将来予測と生活習慣病対策の費用対効果に関する研究」より抜粋）

真誠会は今後さらに健康増進、体力増強などの介護予防活動を発展し、また現在の団塊世代、前期高齢者のモチベーションを上げ、積極的な社会参加、新しい助け合いのまちづくりの支援に取り組んで参ります。

第19回 米子ホスピタウン夏祭り

今年も 8 月 10 日に恒例の米子ホスピタウン夏祭りが開催されました。

職員が御神輿の練り歩きを行いました。利用者やご家族、地域の皆さんでワッショイ、ワッショイ！と大きな声を出して祭りの始まりです。

地域交流ステージでは、河崎花笠踊りを披露してくださいました。とても華やかですてきでした。

職員によるソーラン節、余興では、歌やマジックショーもあり会場は大いに盛り上がりました。

その他、出店もたくさん出店していただきました。身体にやさしいお豆腐のお店など、暑い夏にはさっぱりしたものが食べたくなりますよね。

バザーはとても人気があり、あっという間に完売です。

会場の皆さんは思い思いに楽しまれていました。

夏まつり

第14回弓浜ホスピタウン地域福祉交流夏祭り　盛大に開催

今年で 14 回を迎えた弓浜ホスピタウン地域福祉交流夏祭りが 8 月 24 日、弓浜ホスピタウン（大崎）の 2000 年ホールで開かれ、入所者様、利用者様をはじめ、ご家族、地域の皆様など多くの方々が来場され、にぎわいました。

職員による神輿の練り歩きで祭りの開催を告げたあと、和田荒神こども太鼓による元気な「お祭り太鼓」で幕開けしました。ステージでは、古藤龍生さんによる南京玉すだれの妙技や崎津公民館詩吟クラブによる息の合った詩吟、新入職員の銭太鼓、ピースポート職員の「ソーラン節」踊りが繰り広げられ、最後は参加者が輪になって「炭坑節」を踊り、交流を深めました。

会場では、飲料水やアイスクリーム、かき氷、たこ焼き、ヨーヨーなどの屋台やバザーコーナーも設けられ、来場された皆様は例年になく暑かった今年の夏のひとときを心ゆくまで楽しまれていました。

介護職員初任者研修が始まります！

厚生労働省は、介護人材の今後の育成方針について、「初任者研修修了者⇒介護福祉士⇒認定介護福祉士を基本とする」と示しています。

平成 25 年度から真誠会においてもホームヘルパー養成研修から初任者研修へと移行し、介護人材の育成にさらに力をいれていくことになりました。

真誠会の現場の介護スタッフや各分野の専門職が講師となり、介護技術や介護保険制度などについて研修を実施します。

今まで真誠会ホームヘルパー研修も 12 回あり、講師陣も講師経験に豊かで、わかりやすい講義が展開できるようになりました。

平成 25 年度は 12 月に開校予定で準備を進めています。これからの質を求められていく「介護」も資格が大きく重要視されていきます。

是非「介護って素敵・楽しい」を感じて頂ける真誠会の介護初任者研修にご参加下さいませ。

日本音楽療法学会学術大会で日野原先生が講演

音楽を通した人と地域のつながりについて講演される日野原先生

「第 13 回日本音楽療法学会学術大会」が 9 月 6 日から 8 日まで米子市で開かれ、日本音楽療法学会理事長で、「新老人の会」会長、そして医療法人真誠会　名誉理事長の日野原重明先生が、音楽を通した人と地域のつながりについて講演されました。

日本音楽療法学会は 2001 年、日野原先生が立ち上げられたものです。音楽療法の臨床での有用性が評価され、最近ではがんのターミナル期の患者さん、高齢者、認知症の患者さんへの心のケアとして非常に高い評価を受けています。

日野原先生は 7 日、「人と地域につながる音楽のアートとしての技（わざ）」と題して基調講演され、講演会は一般市民にも無料開放され、会場のビッグシップ大ホールの 1800 席は満員の聴衆で埋め尽くされました。

今年で 102 歳を迎えられる日野原先生は「10 歳で腎炎のため休学したとき、ピアノを習い始め、20 歳で結核のため 1 年間大学を休学したとき、独学で作曲を勉強しました。戦時中には看護専門学校の音楽教師を務めた経験があります。病気によって、音楽を学ぶチャンスを与えられました。苦難は後に恩寵をもたらします」と人生の中で音楽とのかかわりを紹介されました。

そして、「音楽にはさまざまな効果がありますが、音楽は民族や国に違いを越えて心をひとつにする力があります。音楽は人間の生きようとする力にかかわる営みであり、平和を希求する人間の心の現れでもあります。人と地域につながる音楽を」と講演の間は原稿もなく、立ちっぱなしで、しかも最後までエネルギーにあふれた声でお話をされました。

日野原先生の長寿の秘訣は、音楽を心に生きることかもしれません。私たちも音楽を心に、苦難を乗り越えて希望に満ちた人生を送ることの大切さを教えていただいた 1 時間でした。

日野原先生の最終目的は音楽療法の有効性が評価され、医療や看護と同様に、健康保険の適用を受けることにより、より多くの患者さんが個人負担なく音楽療法を受けることができ、闘病生活が安らかなものになり、人生の最期が音楽で締めくくられること、同時に音楽療法士の立場を確立し、音楽療法士の生活を保障することではないでしょうか。

そのような時代が来ることを信じてやみません。

当日の夜は、米子コンベンションセンター BiG SHiP 2 階 国際会議室にて全国から参加している約 500 名の会員が集まり交流会が開かれました。

交流会は日野原先生の挨拶で始まりました。

私は日野原先生のお隣の席に座らせていただき天にも昇る気持ちでした。その後、日野原先生からご指名をいただき、壇上で挨拶をさせていただきました。学生時代から学会での発表は幾多と経験してきましたが、全国学会での挨拶は初めてでしたので、緊張しましたが、地元を代表して挨拶をさせていただきました。

全国の音楽療法士の皆さんに歓迎の言葉を申し上げるとともに、今回の学会に際して大会誌の表紙の裏をつかったスポンサー記事に載せた私の言葉を読み上げました。「音楽療法士の皆さまのやさしい想いが音楽を通してより多くの人々の心に　生きる喜びと、勇気をもたらしますように」と。

本来は一会員であった私が今回の学会でただならぬ対応をうけ、たくさんの新しい出会いをいただいたことはとても光栄な一日でした。日野原先生はいつまでも私にとってゴッドであり、人生のマジシャンであり続けていらっしゃいます。

いのちのギフト
犬たちと私から送る勇気のエール

著　者／日野原重明
定　価／1,575 円（税込）
出版社／小学館